

Die Eiche

ディ アイヘ
<http://www.jdg-chiba.com>



Japanisch-Deutsche Gesellschaft
der Präfektur Chiba
〒274-0822 船橋市飯山満町 2-518-1
清和会第2ワールドナースングホーム内
電話 047-461-9111 Fax 047-461-7010

2017 新年のご挨拶 会長 金谷誠一郎

後継者の育成 若者、女性が楽しめるイベント 会員のご協力をお願い

皆様新年おめでとうございます。今年の正月は、松の内こそ穏やかな毎日でしたが、1月20日のトランプ米国新大統領就任後は、選挙期間中に発表していた公約を次々に大統領令として署名し、世界を驚かせています。

とくに、1月27日に署名した難民や「テロ懸念国」市民の入国を制限する大統領令が各国及び米国内に反発、混乱を招いています。また、わが国は中国同様に何年も円安誘導を繰り返してきたと非難されており、今後の日米貿易、私達の生活にも大きな影響を与える可能性が心配される状況です。



金谷会長



協会ロゴマーク

そのような中、当協会は人間でいえば成人式を終えて、新たな20年に向けて一歩を踏み出したわけですが、基本的には協会規約にある「会員の協力により千葉県における日独友好親善を図ることを目的とする」を念頭に置いて、「ドイツ軍人慰霊祭」をはじめとする行事を粛々と実行しながら後継者を育てることに注力して行くことが重要であることは論を待たないと考えます。幸い昨年は10代の大学生をはじめとして9人の新入会員を迎えることが出来ました。今年は

- ① 若い人も一緒に楽しめるイベント
- ② 女性を対象とするイベント

なども取り入れて、さらに多くの新入会員を迎えるべく工夫してみたいと考えております。

会員の皆様のご協力を是非お願い致します。



講演する松沢幸一氏

“液体のパン” ビール物語

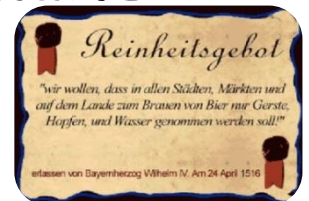
元キリンビール社長 松沢幸一氏 楽しく、興味深く ‘17新春講演会 開く

元キリンビール社長、松沢幸一氏を講師に招いた「新春講演会」が1月29日、船橋市中央公民館で開かれた。ドイツの長い滞在経験と品質・製造管理を手掛けてきた技術者が、次々に繰り出す「ビール物語」。その歴史、技術革新などに会場の愛飲家たちは熱心に聴き入った。

講演会には、47人（うち会員40人）が参加した。テーマは「ドイツが育んだビールと、その産業・文化」。「南極探検隊員になりたくて」北海道大学に進んだ松沢氏は「志を変えたのではないが、好きなビール」の会社に勤めた、と始めた。

歴史的意義の高い「純粋令」

松沢氏が強調したのは、500年前の1516年にミュンヘンのヴィルヘルム4世が定めた「純粋令」(das Reinheitsgebot)の意義。



松沢氏は「ドイツのビールを世界に冠たるものにしたのはこれがあったお蔭だ」と指摘し、この「法律で高められたドイツビールの名声の上にドイツ人の努力があったからだ」と述べた。「大麦、ホップ、水以外は使用してはならない」と、当時のいろいろな混ぜ物を入れた粗悪品を排除した。大麦は熟期が短く、冷涼湿潤のドイツや欧州中部から半砂漠の高温乾燥地帯まで栽培できる。澱粉と繊維質が多い大麦と違って小麦は粘りこい蛋白質グルテンを含んでいるので醸造の際に澱ができてビール造りに適さない、という。

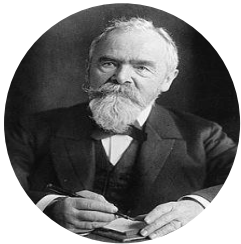
(2面に続く)

(1 面から続く) 一番古い酒はワインと蜂蜜酒だが、ビールの起源も 5000 年以上前のチグリス・ユーフラテス流域（現在のイラクの一部）に遡ると、松沢氏は言う。「畑で作り貯めていた大麦が雨で濡れて芽が出た。もったいないと乾かした。これが実は麦芽。これで酒を造ったら、前よりずっと甘い」。発芽で糖分が増えたわけで、ワイン、蜂蜜酒に比べてビールは「一段階、人間の知恵が加わっている」と、同氏は解説する。

ドイツが「ビール大国」になった理由について、講師は修道院で造られてきた歴史、純粋令もあるが、「ものづくりに真剣なこと」「実験・研究を重ねて理論化して普遍化するドイツ人気質」を挙げた。ビールにもマイスターを頂点とする職業教育制度があり、“現場の人”を大切にする国民性。ビールを教える大学は世界では少ないが、ベルリン、ミュンヘン両工科大学のレベルは群を抜き、各国から学生が集まる。マイスターを育てる専門学校もミュンヘン、ベルリン、ウルムにあるという。

ビールの技術革新で画期的だった冷凍機の発明

ビールをめぐる技術革新と産業化では、J・ワット発



明の蒸気機関の動力を初めて使ったのは機関車ではなく英国のビール会社だったこと、画期的な四季醸造を可能にした 1872 年の冷凍機の発明、ビールを腐らせない低温殺菌法の発見(1876 年)、うま味を保つ酵母純粋培養技術の発明(1889 年)。さらに長持ちさせるためにコルク栓に替わる王冠栓が米国で開発(1892 年)されて、いち早くこれを導入したバドワイザー社が 60℃の温

<冷凍機(右)を発明したカール 水シャワー(低温殺菌法)の機械を作り長期に品質、風味が変わらないビール
フォン・リンデ=グーグルより> を西部開拓地に売りまくり大会社になったなど 18-9 世紀に積み重ねられた技術革新やエピソードが披露された。こうした努力に製造の大型化、自動化、高速化の技術革新が進み、品質のよいビールが安価で提供されるようになり、産業として発展してきた。

また、今日世界で主流となっているピルスナービールがチェコのピルゼン市民醸造所で誕生したのもドイツ人マイスターによるもので、1842 年。ビール愛好家の興味は尽きることがなかった。

講演後の質疑応答では、日本の生ビールと酒税、原料の「水」問題、東ドイツ時代のビールについての質問が相次いだ。会場を移して開かれた懇親会でも、松沢講師を囲んで“ビール談義”が和やかに続いた。



【講演 要旨】 ビールは世界のどこでも、そして最も多く飲まれている酒である。今から 5-6 千年前にメソポタミアで誕生した。ワインや蜂蜜酒のほうが古いが、これらはブドウや蜂蜜を自然発酵させたものである。ビールの場合、大麦中の澱粉を酵母が発酵できる糖まで分解させる製麦(麦芽をつくる)と糖化という二つの工程が必要だった。ビールは人間の知恵がつくった酒といえる。今日までのビールの発展には、ドイツ人が大きな貢献をした。フランク王国カール大帝がビール造りを奨励したので、中世までは中部ヨーロッパの修道院や荘園がビール造りの中心になった。その後、都市や市民が力を持つようになりビール醸造を手掛けた。1516 年にはミュンヘンの領侯がビール純粋令(Das Reinheitsgebot)という法令を發布した。ビールの小売り・製造の規制と罰則を定めたもので、「ビール造りには大麦、ホップおよび水以外は使用してはならない」と決めた。20 世紀初頭までにドイツ全域が、これをもとにしたビール酒税法によってビールが造られるようになった。現在世界のデファクト(標準)ともなっている。ドイツ人たちがこの法令を遵守して、安全で美味しいビール造りを続けてきた結果、ドイツのビール醸造業及びその関連産業は今も繁栄を続けている。ドイツ人たちのもの造りへの執念と畏敬、真理の探求心と熱心な技術開発、理論化と普遍化を好む国民性、実務を織り交ぜた職業教育なども、ビール産業を発展させるのに大きな貢献をした。(まとめは、松沢氏)

<講師・松沢幸一氏略歴> 1948 年群馬県生まれ。北海道大学農学部修士課程修了。1973 年キリンビール入社、福岡工場を振り出しに、主に生産管理部門を歩む。1978-80 年ミュンヘンとベルリンの工科大学でビール醸造学を学び、醸造マイスターの免状を取得。1996-2001 年キリンヨーロッパ社長を務めるなどミュンヘン、ベルリン、デュッセルドルフで 7 年半ドイツに滞在した。ビール業界を中心にドイツに多くの友人、知人を持つ。原料も担当し、ドイツやポーランド、チェコなどへ秋にホップの買い付けに足をよく運んだ。2009-12 年キリンビール代表取締役社長。現在、北大新渡戸カレッジフェロー、参天製薬監査役、埼玉県人事委員。(公財)日独協会会員。



魅了されたドイツ語 言葉のびびき、文法、辞書……

勝見 浩明

「ドイツと私」と言えば、私にはドイツ語だ。NHK のラジオ講座が決定的だった。1975 年、中学 2 年の時。“Jürgen Kreuz lebt in Deutschland”。この言葉の響きに魅了された。英語とはまるで違うメリハリの効いた硬い発音、ウムラウト、エスツェットの特殊文字。外国語への関心はドイツ語に大きく傾いた。だが「まずは英語を」という親の忠告もあり、その取り組みは大学の入学後に持ち越された。

上智大のドイツ語専攻で過ごした期間が私には最も充実した時だったように思う。2 年の終了時で読み、書き、話すというドイツ語の基礎を習得するカリキュラム。完全にドイツ語漬けの日々だった。ドイツ人の教授は授業が始まると、教室に施錠をする。予習して来ない学生には容赦なく辞書が飛んでくることもあった。3 年以降は歴史、政治、経済、文化、地理などのドイツ学、音声学、ドイツ語史、文法、商業ドイツ語。全てがドイツ、ドイツ・・・であった。A3 用紙 3 枚のドイツ語によるレポートの提出が毎週、求められたが、この訓練は語彙を増やす上で有効であった。

授業中のドイツ語音声声を録音し、その後ヒアリングをしたり、東独から日刊紙 *Berliner Zeitung* を航空便で購読して読解力向上に努めた。紙面は工業、農業などの計画達成状況を示すことが多く、あまり面白いものではなかったが、東独から見た国際政治の視点は興味深かった。八重洲無線の受信器 7700 に 3m 程の専用アンテナを取付け、Deutsche Welle, Österreichischer Rundfunk, Sender Freies Berlin, Berlin International などの欧州ラジオ局を短波放送で聞いていたこともあった。



<愛用する東独時代の辞書など>

辞書のことだが、市販の辞書はほとんど使ったが、現在でも愛用しているのが東独発行の現代ドイツ語辞典（6 巻本）。西独の Duden にも大ドイツ語辞典（6 巻本）があり、レベルは高い。しかし、私は東独におけるドイツ語研究に先端性を感じていたからだ。実際、大学では、Gerhard Helbig, Joachim Buscha 共著のドイツ文法（*Deutsche Grammatik*）が採用されていた。当時の Valenz 理論など東独の研究成果を文献で確認、強い関心を持っていた。Duden は正書法、文体、図版、語源、同意語、外来語、意味、コンピュータなどの最新語を網羅したユニバーサルは優れていて、携帯のスマートフォンに入れて便利に使っている。最近、よく使っている辞書は「外国語としてのドイツ語辞典」（Langenscheidt “Großwörterbuch als Fremdsprache” 2015）。レイアウト、図版も一新され、文例も実際の語用法に重きを置いており、なかなかいい。

Wien 大学の夏期ドイツ語講習に大学 3 年の時に参加したこと、約 30 のドイツ語圏の街を訪ねたりもした。外国語、とくにドイツ語の勉強には終わりが無い。言語学的視点からの勉強も続け、同時に一人の民間人として日独の友好に役立ちたいと思っている。



Foto links: dr. Barkhausen-Kürze. Foto rechts: Generaldirektor Wolfgang M. Heckl mit Hirofusa Ito im Ehrensaal des Deutschen Museums. Fotos: Deutsches Museum

貴重な科学遺産 里帰り 伊藤良昌氏 ドイツに贈呈

世界で初めて極超短波(UHF)の発振が確認されてから今年で 100 年。これを記念して唯一日本に現存していた真空管の贈呈式が昨年秋、ミュンヘンのドイツ博物館で行なわれた（写真）。貴重な科学遺産が誕生の地ドイツで永久に公開・保存されることになった。

当協会会員で、KK. KODEN ホールディングス社長、伊藤良昌氏が昨年 11 月 8 日、同博物館に贈った。この真空管はドレスデン大学のバルクハウゼン教授が 1917 年に UHF の発振に成功した Barkhausen-Kurz 管。1920 年代に教授の下で学んだ伊藤氏の父、海軍技術将校だった庸二氏が保存していた。教授は 1941 年の復活祭の朝、約 20 年ぶりに再訪し自宅に泊まった教え子のベット脇にイースターエッグにこの BK 管を入れて“心からの友情の印として贈る」の手紙とともに置いていたという。

感激した庸二氏は苦難の末に戦時下の日本に持ち帰ったが、ドレスデンは第二次大戦の爆撃で壊滅的な被害を受け、大学も破壊され貴重な文化財のほとんどが失われた。

贈呈式には、伊藤氏兄弟、W.M. ヘッケル館長の他、在ミュンヘン領事館関係者ら多数が出席した。また、庸二氏の四男の弘昌・東北大学名誉教授ら日独双方の学者が両国の技術交流について小講演を行ない、交流を深めていた。

格調高かった'16ドイツ語勉強会

当会理事、木戸裕氏を講師に、昨年 10 月～12 月に 5 回にわたり開催した=写真。受講者は 21 人(うち非会員は 5 人)。「ドイツの現状をドイツ語で読む」が狙い。講師自身が作成したテキストのテーマは①メルケル首相の 2016 年頭の演説を教材に押し寄せる難民とその対応②ヴァイツゼッカー元大統領の有名な歴史認識の重要性を説いた演説を教材に 1989 年の壁崩壊とドイツ再統一③ナチ政権下の学生による暴力なき「白バラ抵抗運動」のビラを教材にドイツの贖罪ともいえるべき戦後の反ナチズム④ヨーロッパ統合へ向けて「ヨーロッパ市民形成=シティズンシップ」教育の問題を欧州委員会の HP ドイツ語版を教材にして学んだ。27 ページにのぼったテキストや教材、録音の演説、さらに毎回配布された解説用資料はいずれも格調高く、ドイツ事情の理解が必要とされた。ドイツ語の勉強だけではなく、ドイツの現代史の解説は内容の濃い勉強会となった。最終回後の懇親会では、意見交換が楽しく、和やかに行なわれた。木戸講師のご尽力に改めて感謝します。(坂本宗秋)

'16 X マス&忘年会

12 月恒例のイベントは 10 日夜、津田沼の「ポニョポニョ」で開かれた。会員・家族 30 人が参加し、賑やかに。第一次大戦時の



習志野俘虜収容所の兵士から伝授されたドイツソーセージのレシピを復元した会社社長が協会の勉強会に講演した縁で、1500 CC の大きなフランケンワイン・ボトルとシュトレレンを差し入れた。会員の夫人が手づくりのグリューネワインを 2 本持参するなどテーブルはバラエティーに富んだ食材・飲み物がいっぱい。お馴染みの福康子さん奏でるピアノに、第 1 部 X マス・ソング、第 2 部忘年会ソングと、“飲む、歌う・食べる”の一夜を存分に過ごした=写真。



**協会通信 Die Eiche を
一緒に作りませんか。**

Die Eiche は偶数月の年 6 回発行され、今回で 105 号目となりました。編集部では、編集部員を募集しています。協会の各種イベントや会員向けの情報を取材・執筆し、PC で誌面のレイアウト、編集をしたあと、印刷所へ WEB 送信します。ご希望なら必要なノウハウをお伝えします。有志の方は、090-4392-9808、E-mail: denmasa6457@jcom.zaq.ne.jp 田中正延へ。協会 HP からのメールでも結構です。

◇会員の活動

「地名で読み解く 千葉県の真実」	3/29	水	15:30- 17:30	船橋中央公民館 ＝船橋市本町 2-2-5 ☎047-434-5554	「千葉フォーラム歴史・文化の会」(代表、須古正恒=当協会副会長)の第61回勉強会。講師は「千葉 地名の由来を歩く」の著者、谷川彰英氏=筑波大名誉教授。地名とは何か、地名の謎を解く、現代都市の秘密～などを聴く。講演(¥1000/1人)。後に懇親会(別料金)。
「櫻井良子&土屋有里アザ レ・ジョイントコンサートVol.2 ～ピアノで愉しむモーツァルト」	4/9	日	14:00 開演 1-4-1	シヨパン・サロン ＝八千代市八千代台西 ☎ 070-6653-3516	土屋有里・当協会理事らがモーツァルトの多彩な魅力をソロと2台のピアノで演奏する。全席自由¥2000(当日、¥2500)。問合せは土屋・090-5544-5306 Fax:043-243-5077 E-mail:yuri_tsuchiya@hotmail.com

編集後記

◇松沢氏の独、仏、英 3 国の市場調査も興味深かった。ビールの一番苦いもの、中間、一番弱いもの 3 種を用意する。フランス人は 300 人が 95%の確かさでわかり、ドイツ人は最も苦いものと、そうでないものはわかったが、微妙な差は分からなかった。英国人は区別がつかない。好みも 3 分の 1 ずつに分かれて滅茶苦茶だ、と。旅行の店先で感じた味を思い出して、妙に得心がいった◇ビールの税金はドイツが日本の 20 分の 1 だという。産業奨励と国民を低アルコールに誘導する狙いがあるとか。日露戦争の戦費調達が始まりのわが国の酒税は“取れるところから取る”。税金一つをとってもお国柄が出ることか◇金谷会長の新年の挨拶にあるように、協会も「若者」「女性」が加入しない、とたたない。Die Eiche の変革も迫られています。(M. T.)